

## 令和5年度 第6回 岐阜県社会教育委員の会 議事録要旨

### 1 日時

令和6年2月5日（月） 9：30～11：30

### 2 場所

岐阜県庁20階 2001会議室

### 3 出席者（委員の現在数14人 出席者12人）

#### <委員>

天野 知子  
井上 吉博  
岩田 睦巳  
宇野 舞子  
杉原 和  
益川 浩一  
馬淵 浩史  
松野 泰啓  
松原 勝己  
村瀬 眞実  
山本 真紀  
米原木ノ実

#### <事務局>

環境生活部次長 高橋 一雅  
環境生活政策課長 森 祥一  
生涯学習企画監 安藤由美子  
係長 久留亜理子  
課長補佐 堀 正樹

### 4 議事

#### （1）令和5年度の社会教育施策の実施状況について

事務局： 事業実績について説明

（質疑等特になし）

益川議長： いろいろなテーマで研修実施。県としての人材育成の役割を果たせていると感じる。ご質問や来年度に向けてのご意見等をいただきたい。

宇野委員： 学生ボランティアは良い取組であるが、募集に対し半数しか派遣できなかったとある。学生が集まらなかったのか。

事務局： 学生の応募が少なかった。

益川議長： ぎふ地域学校協働活動センターとしてこの事業に関わっているが、岐阜大学を中心に教職課程がある大学に募集をしている。しかし、活動場所が遠い所には行きづらい、時間が合わない等の理由でうまくマッチングできていない。教員を目指す学生には夏休みや放課後等、学校とは違う子どもの姿を知ることができるので、参加してもらいたい。センターとしても学生の応募が

少ないのは課題と考えている。良いアイデアがあったら教えていただきたい。

天野委員：本巢市は大学生に参加してもらい、ありがたかった。また、地元の高校生がボランティアに参加している。大学生に限らず、高校生に範囲を広げると良いのではないか。

益川議長：高校生が学習支援やものづくりの補助をしている事例もある。今後、高校生ボランティアについても考えていきたい。

馬淵委員：地域学校協働活動として子ども食堂もある。教職課程のある大学に限らず声を掛けると良いのではないか。社会福祉協議会も学習支援のボランティアを募集している。地元で塾を経営している人が土曜日の午前中に学習支援ボランティアを行って良い成果が出ている事例がある。福祉との連携も大切なのではないか。

益川議長：岐阜大学では工学部等へも依頼している。福祉系の大学等に声を掛けることも良いと思う。

事務局：今年度、小中学校の教職課程がある5大学には直接説明に伺って募集を行った。また、他2大学に案内を送付し、掲示板等で募集を依頼した。しかし、大学と市が既に連携している所があり、センターの募集に学生が集まらない。また、バイト、交通手段、有償ボランティアとの兼ね合い等も集まらない要因と考えている。

松野委員：大学がない地域が置き去りになっている。大学がある所との地域格差を感じる。高校生、社会人に広げることで解決できるのではないか。夏休み等を使って合宿で開催するなど工夫した取組が期待できる。その際には宿泊等の補助を考える必要がある。

益川議長：似たような事業を実施している所もあるので、そちらと連携できると良い。ご意見を参考にセンターとして希望にお応えできるようにしていきたい。

山本委員：高山市へ学生ボランティアを呼ぼうと思っても、旅費がかかって躊躇してしまう。以前、国立青少年機構主催のイベントで学生ボランティアと一緒に活動することがあったが、単位取得のために参加する学生、サークルの遊び感覚で参加する学生も一定数存在し、本来の学生ボランティアとのギャップを感じた。大学が存在しない地域は小・中学生の時に地域で体験活動を工夫して行っていく必要がある。そこでの経験や良い思い出が、将来指導者やお手伝いという形で地域活動に参加する好循環を生む。長期的視野をもって取り組む必要がある。

益川議長：学生ボランティアのきっかけは単位取得であっても、参加した後に活動に積極的になる面もあるので、人材育成という視点から受け入れ側も協力してほしい。

馬淵委員：資金不足から学生のニーズと事業をマッチングする機会の損失が起こらな

いようにしたい。有償ボランティアとしての実施を考えても良いのではない  
か。まちづくりに参画したい学生を横断的に支援する仕組みが整うと良い。

益川議長： マッチングの調整がなかなかできない面もあるので、対応を考えていき  
たい。いただいた意見を参考に希望にすべてお応えできるようにしていきたい。  
その他の事業についてはいかがか。全国から良い講師を呼び、研修を実  
施してもらっている。人材育成研修の修了生から、県やセンターの講師を務  
める人が生まれている。成果が出ているのではないか。

馬淵委員： 研修のオンラインと対面のバランスをどう考えているか。

事務局： より多くの人に参加してもらうためにオンラインが中心。ネットワークを作  
りたい研修は対面で行っている。

馬淵委員： リアルでしか学べない所もある。2日の研修であれば、1日目はハイブリッ  
トで、2日目は対面でというようにバランスをとって実施する方が良いと思  
う。

益川議長： 研修の目的に合わせて最適な組み合わせで実施してもらいたい。地域学校協  
働活動市町村ネットワーク構築会議は、今年度新規事業として取り組まれた  
が成果はいかがか。

事務局： 各地区の交流も必要ということで実施した。他の会議と合わせて実施した  
り、単独で実施したりと地区の実情に応じて開催。各地区での交流を通して、  
地域学校協働活動推進の意識づけや情報交流ができたと聞いている。

松原委員： 市町村支援プログラムの課題となっている活動が十分とは言えない市町村  
への対応はどうするのか。

事務局： センター員・県事務所の担当が働きかけを行っていききたい。設置してからも  
継続的に活動を進めていくため、伴走支援が必要と考えている。

益川議長： 学校運営協議会を設置しても地域学校協働活動が進んでいかないこともあ  
る。組織を構築して推進員を置かないと実際に活動が進んでいかない。本部  
機能の充実のため、伴走支援がますます必要と感じている。

馬淵委員： 地域の人の中には学校のためにと考えている人はいるが、地域と学校がつな  
がらない。そこで、社会教育士の取得が重要だと考える。地域のまとめ役と  
なる人が必要であるし、そのような人が社会教育士を取得していくことが重  
要である。

天野委員： 教員が地域と一緒に活動する意味を理解しないと進んでいかないの  
で、先生と地域をつなぐ人が必要である。教頭先生だけわかってもいけない。一  
般の先生が地域学校協働活動について理解する必要がある。

益川議長： 学校も働き方改革、部活動の地域移行など大変であると思う。しかし、地域  
との連携により学校の授業が成り立っている部分があるのも現状である。

村瀬委員： 過去の長期支援が伴走支援と変わったことからこの施策が進んだと感じる。  
少し前と比べると取組市町村も増えている。これからのキーワードは、行政

の横の連携、地域学校協働活動の教員の負担感の軽減である。保護者、若い教員へのアプローチが重要。

益川議長： 来年度以降も社会教育について発展的なものになるよう取り組んでいただきたい。別件になるが、優良公民館表彰については、取り組んでいる所はたくさんあると思うが推薦が少ない。もっと候補を出していただきたい。

## (2) 岐阜県社会教育委員の会の活動について

事務局： 資料に基づき説明

益川議長： 令和3年から「子どもを核とした地域づくりを支える人とは」を審議題に協議し、成果物としてハンドブックを作成することができた。今後に向けてご意見をいただきたい。

米原委員： ハンドブックを見ながら振り返っていた。皆さんからの意見が反映されて良いものが完成したと思う。

天野委員： ハンドブックは大変見やすく、良いものとなった。取組を真似する所からはじまるので、目につく所に置いてもらえるようにしたい。

井上委員： 熱心な皆さんの意見をうかがっていて、地域との関わり方を考えさせられた。コロナを経て子ども会等の活動をやめる傾向がみられる。今回の審議題の「子どもを核とした」という所で引き続き活動をしていくことが大切だと感じている。

岩田委員： 子ども会の事業をやめていこうとする傾向があるが、「大人の事情」でやめていないか。やめた活動に代わる活動はどうするのか。子どもの価値ある活動をどう保障していくのか心配している。また、子どもの意見を聞く機会がないと感じている。羽島市は益川教授に協力していただき、学校運営協議会に子どもが入る機会を設けている。ワークショップ等を大人と子どもで行っている。地域学校協働活動は大人が動かしているが子どもの参画、子どもに立ち返るといことが大切になってくるのではないかと。

益川議長： 大人が良いと思って活動しているのではないかと思うこともある。主役である若者、子どもの意見を取り入れることが必要であると思いはじめている。

宇野委員： これまで地域学校協働活動は聞いたことがあるけれど、よく知らなかったため、保護者の目線でこの会に参加し、勉強になった。子どものためにたくさん大人の協力がしていることがわかった。また、成果物を通して、理解を深めることができたのはありがたかった。

杉原委員： この会に参加するだけで勉強になった。幼稚園として参加できてありがたかった。これからは中学生が即戦力である。震災で活躍している中学生の活躍が聞かれる。そうした意味からも本会に中学校代表者にも参加してほしい。また、この会議の熱量が学校に反映されると良い。県が主催する研修会を積極的に取り入れていただけるように市町村教育委員会との連携が必要。子ど

もにとって最善の利益は何かと考えると社会教育の視点が重要。本会の熱量をどう伝えていくかが課題だと思う。

益川議長： さらに教育委員会との連携を深めていきたい。

馬淵委員： 委員の方が実践者であり、勉強になった。社会教育士の資格取得も考えるようになった。こども家庭庁も子どもの意見を聞いて大綱を作成している。本会で子どもの意見を聞くというのはいかがでしょうか。地域の絆が薄まってきている。コロナで復活した祭りには多くの人が集まっている。今を新たなスタートのタイミングにしていけると地域も活性化する。地域と学校をどうつなぐかというのも考えていくことが大切。

松野委員： わかりやすいハンドブックとなった。地元の小学校が昨年度で閉校となった。住民は、距離が離れていることもあり統合先の学校の活動にはなかなか参加する気がおきない。学校というクッションがないと地域とのつながりがなかなか生まれないことを痛感した。学校に代わって地域の団体が活動を行っているが、これまでのようにはいかない。今後少子化で同じ状況が生まれてくる。学校がない地域が、子どもとどうつながっていくかが大きな課題となってくると思う。そういったことも考えていければ良いのではないか。

益川議長： 学校統合の問題はますます出てくると思う。自治体の中でも状況が違ってくるため、それぞれで考えていく必要が出てくる。

松原委員： ハンドブックは非常に簡潔で読みやすい。もっと知りたいという探求心を生む。審議題については、次は人を活用してどういう地域にしていけるか、その次は地域がどんな人を育てていくかになるのか。

特別支援学校では、校区、所在地、居住地域等、地域もいろいろな考え方ができる。活動によって使い分けをするのが一番良いのかと考えている。

益川議長： 小中を中心に考えがちだが、いろんな局面で幅広く地域を考えることも必要である。

村瀬委員： 社会教育は広い。学校以外にもどう広げていくか。また、地域の実態も様々である。全ての実態に対応することは難しい。中学校区という視野も必要である。

益川議長： 幅広い意見をいただいた。自分が気づけなかった点も委員の皆さんから学ぶことができた。

山本委員： ハンドブックでいろいろな事例を知ることができた。また、成果物として良いものができた。社会教育とは何かという話が居住する地域で話題となった。地域防災をテーマに、講師として参加する機会があったが、そこで感じたことは社会教育が従来あったものから広がっているということだ。社会教育士として民間で活動している立場で話をする機会もある。県の社会教育委員の会の話も紹介させていただきたい。新審議題については、長い期間地域学校協働活動をテーマとしてきたが、いろいろな所からアプローチすること

も必要かと思う。もう少し間口を広めて長く研究協議していくことも考えられる。または、地域学校協働活動を更に突き詰めていくことも考えられる。

益川議長： これまで地域学校協働活動に焦点化して審議してきたので、もう少し広めるという方向もあると思う。岐阜県はいろいろな意見を踏まえて成果物にまとめて発信しており、社会教育委員の会の役割を果たしている。今後も皆さんの意見を頂戴しながら進めていければと思う。

事務局： 委員の方々から意見をいただく中で新たな気づきがあった。学校にも広めていければと考えている。

益川議長： 本日いただいた意見を生かして、次回、新しい審議題を決めることとする。

益川議長： 議事が終了したため、進行を事務局へお返しする。